第3回部活動地域移行及び地域スポーツ・文化芸術活動の機会確保に向けた検討委員会議事録

1　日時

令和7年（2025 年）3月 18 日（水）14:00～16:00

2　会場

STV北2条ビル6階AB会議室（札幌市中央区北2条西2丁目）

3　出席者

⑴　委員（12名）※五十音順・敬称略

和泉　明一　　札幌市立八条中学校校長
伊藤　裕子　　札幌文化団体協議会事務局長
井上　晃男　　一般財団法人札幌陸上競技協会副専務理事
大内　秀之　　札幌地区吹奏楽連盟事務局長
尾崎　茂樹　　市立札幌旭丘高等学校校長
佐賀　主昌　　一般社団法人札幌地区サッカー協会常務理事
清水　友陽　　公益財団法人北海道演劇財団常務理事
杉本　淳　　一般財団法人札幌市スポーツ協会事務局長（副委員長）
高橋　直之　　札幌市立光陽小学校校長
平本　健太　　北海道大学大学院経済学研究院　教授（委員長）
宮路　真人　　札幌合唱連盟事務局長（北海道文教大学附属高等学校校長）
和田　圭吾　　札幌地区バスケットボール協会U15 部会長

⑵　事務局（9名）

佐藤　圭一　　教育委員会　学校教育部長
吉田　憲史　　教育委員会　調整担当部長
喜多山　篤　　教育委員会　児童生徒担当部長
田中　裕樹　　教育委員会　学校教育部　学びのプロジェクト担当課長
末原　久史　　教育委員会　児童生徒担当部　児童生徒担当課長
石郷岡　徹　　教育委員会　学校教育部　学びのプロジェクト担当課
　　学びのプロジェクト担当係長
高橋　智子　　教育委員会　児童生徒担当部　児童生徒担当課
　　児童生徒担当係長
柴垣　孝治　　市民文化局　文化部　文化振興課　企画係長
北岡　啓佑　　スポーツ局　スポーツ部　企画事業課　企画担当係長

4　議事録

【事務局：田中学びのプロジェクト担当課長】

定刻となりましたので、「第3回部活動地域移行及び地域スポーツ・文化芸術活動の機会確保に向けた検討委員会」を開催させていただきます。本日は、委員の皆様には、大変お忙しいところご出席いただきまして、誠にありがとうございます。私は、検討委員会の事務局を担当しております札幌市教育委員会学校教育部学びのプロジェクト担当課長の田中でございます。どうぞよろしくお願いいたします。会議に先立ち

まして、昨年度の開催以降、本委員会に関わる部長職が交代となっておりますので、簡単にご紹介させていただきます。皆様からご覧いただいて右側から、佐藤学校教育部長、吉田調整担当部長、喜多山児童生徒担当部長でございます。どうぞ、よろしくお願いいたします。
　本日はお手元にお配りしております次第に基づいて進行させていただきますので、配付資料の確認からさせていただきます。

＜資料の確認＞

【事務局：田中学びのプロジェクト担当課長】
　それではここからの進行は平本委員長にお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

【平本委員長】
　皆様こんにちは。年度末のお忙しいところお集まりくださいましてありがとうございます。本日も忌憚のない活発なご議論をいただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。それでは以後の議事につきましては私が進行させていただきます。それでは、お手元の次第にございます2つの議事につきまして、事務局から順番にご説明をいただきたいと思います。
　まず1つ目の、「令和6年度における部活動の地域移行・地域連携に向けた実証事業の実施状況」につきまして、事務局からご説明をいただいたのちに、皆様にご議論いただきたいと思いますので、事務局からのご説明についてよろしくお願いいたします。

【事務局：石郷岡学びのプロジェクト担当係長】
　（資料1に沿って説明。）

【平本委員長】
　どうもありがとうございました。ただいまのご報告について、ご質問、ご意見ありますでしょうか。

【宮路委員】
　経費の問題が非常に大きいと思います。先行的に進められている神戸市では、実際に各家庭や保護者がどれくらいの経費負担を想定されているのか、その情報がありましたら教えていただきたいと思います。

【事務局：田中学びのプロジェクト担当課長】
　電話で聴き取った情報では、1月当たり 3000 円から 5,000 円程度を想定されているようです。

【高橋委員】
　札幌市立光陽小学校長の高橋です。説明を聞きながら、これまで行われてきた小

学校における少年団活動や、中学校、高等学校、特別支援学校で行われてきた部活動が、いかに指導者のボランティア精神に基づいて行われてきたかを痛感しました。今日説明いただいたこれらの事業は素晴らしいものですが、参加する子どもたちの多様なニーズを充足させるための事業という印象を受けました。これまでの少年団活動や部活動は、その学校の児童・生徒のための活動であり、学校のまとまりや士気を高める活動でもあったと思います。しかし、時代とともに個々のニーズに応える事業へと変わっていく必要があるのではないかと率直に感じました。また、経費のことを考えると、これまでは指導者のボランティア精神に基づいて、参加する子どもやご家庭、保護者が大きな負担をせずに参加できる環境だったことを改めて感じました。

【平本委員長】
　どうもありがとうございました。そのほかにいかがでしょうか。

【伊藤委員】
　札幌文化団体協議会の伊藤でございます。経費のことばかりで大変恐縮ですが、資料を見ますと、国としては受益者負担に100％移行したいという意向が分かりました。しかし、先ほど高橋先生もおっしゃったように、家庭の負担には限度があると思います。市の方で今後、団体に対する助成金などの制度をどの程度考えているのか教えていただければと思います。

【事務局：田中学びのプロジェクト担当課長】
　正直に申し上げますと、まだ予算の目途が立っている状況ではございません。実証事業として実施した場合の収支の状況はある程度見えていますが、もしこれを市全体で実施するとしたらどの位の規模になるのかなどといったことも考えなければならないと思っていますし、マックスでやるとしたら、例えば今ある学校部活動をすべて置き換えるという考え方もあれば、ある程度集約化していくという考え方もありますので、どれを選択するかによって、予算の規模は変わってくると思っているところです。現時点では、できるだけ受益者負担で賄えるような形が本当にできないのかどうかというところを模索しながら、それが難しいのであれば、何か手立てが出来ることはないかということを、全体のことを見ながら考えていく必要があると思っています。

【事務局：石郷岡学びのプロジェクト担当係長】
　先ほどの私のご説明に語弊があったようですので、補足させていただきます。先ほどのご説明では、仮にこれらの実証事業を受益者負担だけで実施しようとしたらいくらくらい必要ということでご説明差し上げたところでして、国の方でも、地域クラブ活動を 100％受益者負担で実施すべしと言っているわけではございません。「地域スポーツ・文化芸術創造と部活動改革に関する実行会議」の中間とりまとめにおきましては、「次期改革期間における費用負担の在り方等」として、「受益者負担と公的負担のバランスを検討し、安定的・継続的な活動を支えるための費用負担の在り方を見出す必要がある」ことや「企業版ふるさと納税やガバメントクラウドファンディングをはじめとした寄附等の活用、民間企業との連携等、受益者負担と公的負担以外の新たな財源の確保についても検討が必要」ということが示されているところです。

【佐賀委員】
　札幌サッカー協会の佐賀でございます。よろしくお願いいたします。お話を聞いていて、一年ぶりの会議ということで、実証事業という形で具体的に様々なことが進んでいることがとてもよくわかりました。ただ、これを単発ではなく継続的なものにしていくためには、これから考えなくてはならない非常に重要な問題だと思いました。
　資料にある今後の課題について考えますと、「運営団体の体制整備」については、例えば当協会と連携して、協会で実施している事業の中に組み込んでいくことが考えられます。「活動場所の確保」については、場所が東雁来なので少し遠いですが、空いている時間帯やスペースを一緒に使うことで提供できる部分があるのではないかと思いました。
　また、「財源の確保」については、札幌も北海道もサッカー協会の登録者数が減少していることが課題となっており、協会としてスポンサー探しを始めているところです。実証事業の中で民間事業者が入っているものもありましたが、教育委員会としてどうなのか分かりませんが、スポンサーを探して活用することも一つの考えとしてあるのではないかと感じています。
　中学生も、例えばスポーツの部活動では、サッカーのクラブチームが増えてきており、合同チームも出てきています。合同チームでは試合に出られない子どもたちも出てくることになりますので、楽しくサッカーをしたいという子どもたちの受け皿を考えることも必要だと思います。
　私は小さい子どもたちを対象にサッカーを指導していますが、先日中学生の子どもたちが一年生、二年生のフェスティバルの手伝いをしてくれました。そのような形でフェスティバルの手伝いをしながら、自分たちの活動の時間を作ることで、選手としてだけでなく、運営や指導をすることも子どもたちに育てていく観点が必要だと思いました。
【井上委員】
　札幌陸上競技協会の井上です。先ほどご説明いただきました南区の実証事業にすこし関わらせていただきました。今回の陸上競技の実証事業については、コーチとして道内トップクラスの方々に関わっていただきました。そのことで指導者への報酬がかなり高額になっているのかなと思います。今後、このような取組を全市的に広めていくとなると、指導者の確保がやはり大きな課題であると思います。先ほどのお話の中にありましたように、報酬を含むという場合は、それなりの資格を持っている方を、これから、我々の業界でも養成していかなければならないと考えております。
　もう一点、このような取組を各区に広めていくという場合に、合同練習という形が多くなってくるかと思いますが、その際の活動場所の調整が学校なり教員の仕事となってしまうと、地域移行しても、働き方改革の観点からは違う意味で新たに負担が生じてしまうのではないかという懸念があります。

【清水委員】
　北海道演劇財団の清水です。私たちも本年度の実証事業に関わらせていただきました。先ほどご説明があったように、演技だけではなくて、ダンスやテクニカルなことも含めて幅広く行ってきました。今後は、他の部活動ともコラボレーションしながら、演

劇部だけではなくて、例えば美術部と組んで、セットを一緒に考えたり、チラシをデザインしてもらうとか、音楽系の部活動と協力して作曲してもらったりといったように、繋がりを持って、部活動の考え方を広げていくということも、それが経費削減なのか、どうつながっていくのかはわからないのですが、考え方としてあるなと思いながら、今回の実証事業に携わってまいりました。

【平本委員長】
　資料の最後にまとめていただいた「誰が」「どこで」「どうやってお金を調達して」という 3 点の課題についてですが、「どこで」については、おそらく中学校の施設が利用できると思います。もちろん、どのように調整するかという課題はありますが、デジタル技術が進んでいる現在、鍵の受け渡しにしても、Airbnb の民泊システムのように無人でやり取りができるので、少しのテクノロジーを取り入れれば解決できると考えます。
　しかし、「誰が」という点については、今回ご参加の皆様方も各種団体としてコミットしていただけそうですが、やはりお金の問題が一番大きいと思います。一つの考え方として、従来コストとしてきちんと計上されていなかった先生方のシャドーワークのコストを算定し、そのうちどこまでを行政が負担するのかを検討する必要があります。
　また、先ほど井上委員からお話があったように、例えば南区の陸上の実証事業ではトップアスリートの方々が指導してくれることでコストがかかっています。それはおそらく、e スポーツなども同様です。部活動の指導者が指導する時のクオリティと、トップの指導者が指導する時のクオリティにどれくらい価値の差、価格差があるのかを測ることで、受益者負担と公費負担のバランスを見出すことができます。つまり、従来の部活動的なものであれば 1 割でよいが、ハイレベルな指導を受ける時には受益者負担は 7 割必要になるのではないかという具合に、経済学的な考え方を取り入れたうえで、財源も含めて受益者負担をどうするかを考える必要があります。
　どのような計算モデルを使って考えるかについてはすぐには答えが出てこないかもしれませんが、このような原則的な考え方を取り入れないと、この議論について共通の基盤が得られないのではないかと感じました。
　その他にご発言ございませんでしょうか。それでは議題2「札幌市における部活動の地域展開に向けた方針検討」についてご説明をお願いいたします。

【事務局：石郷岡学びのプロジェクト担当係長】
　（資料2に沿って説明。）

【平本委員長】
　ありがとうございました。ただいまご説明いただきましたとおり、現状維持から完全移行まで、大きく分けて4パターンあるということでした。また、地域クラブ活動の目標として750か所という理論値も示されましたが、これが妥当なのかなどについても委員の皆様のご意見をいただければと思います。

【宮路委員】
　意見というよりはお願いになってしまいますが、やはり経費が大きな課題であると

思っています。本当は、何十年にわたる国の無策のせいだと思います。文化活動、スポーツ活動を学校に丸投げして、必要な人材、施設、費用などを担保してこなかったつけが今回ってきているのだと思いますが、少なくともこれまでは学校部活動が文化活動、スポーツ活動のすそ野を作ってきました。部活動で体験したことがもしかしたら体験で終わるかもしれないし、大きく才能を開花させるかもしれないということで、このすそ野を何とか守りたいと思いますが、裾野を守るには、高い費用では無理なのだと思います。費用を払える家庭の子どもだけが活動に参加できるというのはまずいと思いますので、そういった観点から心配している点が何点かあります。民間事業者に委託していくこと自体は流れとして仕方がないことですし、専門の指導者もいらっしゃるということは良いことですが、例えば学校施設を使う際に、外部委託した民間事業者に少しでも使用料を請求するとなると、その分が参加費用に加算されてしまうことにつながる。また、文化団体についてはあまり心配はしていないですが、スポーツ団体は怪我・事故の問題が非常に大きいと思いますし、保険にも加入するとしても、怪我・事故の責任の所在はどこにあるのか、それは例えば市教委が担保してくれるものなのかといったあたりの立て付けも、やはりきちんと整理していただきたいと思います。市教委が旗を振って地域移行に持って行くのであれば、施設使用に関して、費用負担がかからないようにご配慮いただきたい。そして責任問題について明確にしていただきたいと強く願うところです。

もう一つは、子どもの数に応じて統合しながら活動場所を設置していくことには非常に賛成なのですが、子ども達にとって部活動に参加するということは、みんながアスリートを目指しているとか、みんなが高い技術を目指しているということではなくて、大事な教室以外の居場所という要素もすごくありますので、やはりそういう意味では、学校という場所を大いに活用できるような体制をとっていただきたいという希望であります。

【平本委員長】

ありがとうございます。事務局にお尋ねしますが、神戸市が令和8年度から完全移行するということで、宮地委員のご発言にありました使用料や責任の所在について、神戸市の状況について何か情報はございますか。

【事務局：石郷岡学びのプロジェクト担当係長】

神戸市の担当の方に確認したところ、学校施設の使用料については減免ということで、使用料を取らないとのことでした。その分を、受益者負担の割合を低くしたりとか、指導者の報酬に回したりしてほしいというような趣旨ということでございました。また、保険につきましては学校施設を貸すにあたって、地域クラブとしての団体登録が必要となるのですが、団体の要件の1つとして保険の加入が必須条件となっているようございます。

【宮路委員】

保険の部分は当然の措置だというふうに思います。私が一番危惧しているのは、実際に事故が起こった場合に、例えば指導者であるとか、活動の管理者が十分な管理監督をしてなかったのではないかという責任を問われるようなことになると、そこま

で求められるのであればなかなか手出しづらいというような話が出てくるのではないかということです。部活動の大切な要素を担保しながら、地域に移行していって、教員の負担を軽減していくということが理想なのだと思いますが、そこが少し怖いところなので、事故が起こった際の監督者責任についても、まだ時間がありますので検討していただけたらと思っているところです。

もう一つ言い忘れたことがあるのですが、今はまだ中学校の話をしているので、もしかしたらこの委員会の論議は中学校で終わりということになるのかもしれないですが、札幌市には市立高校もありますので、高校の段階になってきますと、一つ考えなくてはいけないのは、私立校の取扱いをどうするのかという話です。私立中学校は少ないですけれども数校はありますし、よくこういう議論の中で出てくるのが、市教委は管轄外であるという話が出てきてしまうので、その辺りも一定の関係団体との協議などしていただければなというふうに思います。

【平本委員長】

ありがとうございます。最後のご意見についてはこの委員会で議論できるかどうかは別としては、問題提起としては。重要なご提示だと思いました。

【事務局：田中学びのプロジェクト担当課長】

監督責任につきましては、基本的な考え方としましては、地域移行した場合はその団体で活動しているということになりますので、その団体がきちんと責任を持っていただくことになります。だからこそ、教員も指導する場合は別途団体に指導者として登録して報酬を得るという形が基本にはなると思います。その中でも、札幌市としてどこまでコミットできるか。例えばほかの自治体だと色々な研修をしっかり充実させて、安全管理を担保していくための努力はする。ただし、責任の所在についてはやはり団体になるというのが基本的な考え方になると思っているところであります。

もう一つ、高校のお話がありましたので、地域移行に直接関係するわけではないのですが、部活動の外部人材につきまして、来年度から特別外部指導者という有償ボランティアの外部指導者を市立高校でも予算を確保しておりまして、少しずつ視野に入れながら進めているところがございます。私立学校についてこの場で発言することが難しいところですが、今そういう状況になっておりますので、補足させていただきました。

【平本委員長】

ありがとうございます。ほかにご意見はございませんでしょうか。

【杉本副委員長】

札幌市スポーツ協会の杉本でございます。先ほど宮地委員からお話がありました受益者負担や経費の部分につきまして、現状を詳しくは存じ上げておりませんが、部活動においても各家庭や学校がいくらか負担されていると思いますが、基本的にはやりたい子どもはみな活動することができる環境にあると思います。しかしながら、今後受益者負担が増えると、やりたい子どもが活動できなくなる恐れがあります。家庭の事情は様々ですので、これまでのように基本的にやりたいことがすべてできる状況

を維持したいと思っております。基準を設けるかどうかはわかりませんが、なるべくやりたい子どもたちにその場を提供したいと思います。制度が変わったからといって、「もうあなたはできない」というのは子どもにとってかわいそうですので、ぜひその点も合わせてご検討いただければと思います。

【平本委員長】
　ありがとうございます。そのほかいかがでしょうか。

【高橋委員】
　光陽小学校の高橋でございます。資料2の4ページの図を見たときに、受け皿の整備で約750か所というのはどのように算出したのかなと思っておりましたが、5、6ページを拝見しまして、こういう算出方法から導いたものなのだなということで納得したところでした。さて、750か所整備していったときに、そのいくつかは新しい部活動という形かも知れませんし、そのいくつかは地域を母体にした、地域に住まれている方が指導者となるような形かもしれませんし、または民間の企業が運営する形かもしれません。民間となれば、やはり利益を追求しなくてはなりませんから、この750か所に子どもたちが均等に分かれるとは考えにくくて、採算が合わず、途中で頓挫する場合もあるかもしれません。そうしたときに、その子どもたちを救う手立ても必要ではないかと思った次第でございます。なかなか課題もあるのかなと思いました。

【平本委員長】
　ありがとうございます。この750か所というのは、どちらかというと割り算をした数字です。先ほど実証事業でもございましたが、複数の学校が合同で活動するといったことを踏まえると、実際にはこれよりも少なくなる可能性もありそうではありますよね。ですので、この数字は一つの目安として見るのがいいのかなと私は個人的に思っていますけれども、750か所と聞くとものすごく膨大な数のような気がしてきて、なかなかこれ全部を地域に移行するといわれても、気が遠くなるような気がするのですけど、実際ここまで本当に必要なのかなと私は資料見たときに思いました。ほかにはいかがでしょうか。

【和泉委員】
　八条中学校の和泉でございます。資料3ページにメリット・デメリットがまとめてありますが、教員の欄のデメリットに、部活動を継続すると、学校管理下で教員の負担や人事の停滞が継続するリスクがあると書いてあります。そして、下のほうを見ると、休日の移行の場合は、平日の負担は継続するとあります。この教員の人事の停滞や教員の負担が継続するということに対して、教育委員会は課題であると捉えているということでよろしいですよね。

【事務局：田中学びのプロジェクト担当課長】
　当然ここに記載しておりますので、課題と考えているということで間違いないです。ただ、具体的にどのように進めていくかという中で、地域移行を平日まで進めていけば、そういうデメリットがなくなると思っておりますし。当然休日のみの移行で止まる

場合は、平日の部分については少なくともまだまだデメリットとして内在するという課題感を持っているという認識です。

【和田委員】
　バスケットボール協会の和田です。よろしくお願いします。まず、中学校の部活動に関してですが、小学校時代から経験のある子どもたちが競技力を向上するために加入するケースも多くあります。しかし、中学校から活動を始めたいという子どもたちの方が実は多いです。そういった子どもたちがちゃんと入れるような活動になればいいなと心から思っていますが、どうしてもニーズの差が出てきてしまいます。
　現在、他のクラブチームがあると、競技性の向上を目指した子どもたちがそこに入っていきます。その結果、部活動には競技を初めてやるという初心者の子どもたちが入ってきます。このような子どもたちのための受け皿が地域展開を進める際に本当にできるのかどうか、ニーズが二分化する中でそれをどのように共存させるかということが非常に難しい問題です。
　地域展開クラブができた中で、ニーズを分けた活動ができるような仕組みが想定できるのであれば、指導者の人数や活動の頻度の問題が出てきますが、少し解消できるのではないかと思います。それができればいいなという思いがあります。
　また、違う観点からの話になりますが、スポーツ庁が示した休日の移行について、現時点の保護者の視点からすると、部活動として平日も休日も活動できている状況から地域移行するとなると、指導者の費用や活動費がかかり、プラスアルファの費用が増えることになります。今までの部活動は年間数千円でできていた状況から、費用が増えることで「それならやらない」「なんでそんなことしなきゃいけないのか」という保護者がかなりの数いるのではないかと思います。
　私もその点に興味があり、自分の部活動を地域移行に持っていけないかと考えていますが、批判的な意見が出た場合、一つのチームや学校だけで進めることの限界が出てきます。行政や教育委員会が「こういうことをやります」と言っていただければ、少しハードルが下がる部分もあると思います。保護者のニーズと生徒のニーズがずれてくることがあるので、実証事業を簡単に行うのは難しいですが、どこかで舵を取らなければならないと思います。行政と現場、学校が一体となって進めなければならないことだと強く感じました。

【平本委員長】
　はい、ありがとうございます。例えば、パターン２やパターン３では、平日のやり方に違いはあっても、平日は部活動を学校で行い、休日は地域に移行するという形ですよね。逆にパターン ４ は、もう学校で部活を行わないという考え方で、その代わりに地域の受け皿があれば、費用は少し発生するかもしれませんが、今まで生徒たちができていたことはできるはずです。
　一方で、平日と休日を切り離すと、平日と休日の活動の接続や一貫性をどう担保するのかという問題が当然出てくると思いますし、非常に悩ましいところだと思います。そのようなことも含めまして、皆様方のご意見、お考えをぜひざっくばらんにお聞かせいただければと思いますがいかがでしょう。

【和泉委員】
　中体連の立場から、今年度の札幌市の選手権においても、バレー、野球、バドミントン、卓球、柔道、剣道、体操、新体操、陸上にクラブ活動が参加して大会に出られるレギュレーションがすべて出来上がっています。地域クラブ活動は中体連に登録しないと出られませんので、その代表者の方々に、非公式な形ではありますが、どれぐらい月謝を取っているのかを聞いたことがあります。その結果、すべてのチームが月謝 6 千円を超えている状況でした。
　地域移行を進めるにあたり、札幌市が費用を負担してまで安くする必要があるのかという議論のポイントもあると思います。すべての子どもに機会を与えることは大事ですが、中体連でない硬式野球のクラブチームでは、月謝が 1 万円を超えるのが普通です。
　また、中体連の種目で全道・全国大会に出ると、札幌市教育委員会から旅費、交通費、宿泊費の補助が出ますが、空手やバトントワリングなどの上位大会には一切補助が出ません。一方で、月謝も何倍も高い状況です。学校部活動は年間 5 千円程度で、先生方が無償の労働で支えてきたというバランスが非常に難しいと感じています。非公式な値ですが、現実はこのような形ですのでお知らせします。

【平本委員長】
　ありがとうございます。やはり月額で 6 千円とか、場合によっては 1 万円を超える金額を負担するのが一般的な地域クラブの実情であるという、大変重要な情報提供でした。部活動とは何かという根本的な議論にも関わるところで、先ほど杉本議員から「居場所」という話がありました。
　競技性を極めたいわけでもなく、特定のスポーツや文化・芸術活動に強い関心を持っているとも限らないけれども、友達と一緒に参加することで楽しい時間を過ごせるということもあります。部活動を何と捉えるかによって大きく変わってくるわけです。
　パターン1で進めるというのは、多分熊本市はすごく努力をされてこういうことを選ばれているのだと思いますが、札幌市でこれができるかどうかは、過去2回の議論を踏まえると、ちょっと厳しいかなと委員の皆様が思ってらっしゃるのではないかと私は受けとめています。それでは、地域に移行するとしたときに、どのようなやり方があり得るのか、また、従来生徒たちが得ていた満足感を奪わずにうまく地域に移行できるのかという非常に難しい課題を、今、我々は論じているのだと思います。
　委員の皆様、ぜひどんなことでもかまいませんのでよろしくお願いいたします。

【大内委員】
　吹奏楽連盟の大内です。よろしくお願いします。昨年もこの会議に参加させていただいて、本日も参加させていただいているなかで、一番印象に残っているのは、札幌市として何も決まっていないということは素晴らしいことだと僕は思っています。真面目にこのことを考えたら、きっと何も決まってないくらいのところまで、いろいろ考えられているからこそ言える言葉ではないかと思います。部活動の地域移行と言われて久しいですけれども、これも言葉として間違ってると実は思っていて、学校で行われている部活動が地域でできるようになるわけではなくて、部活動で行われていた競技とか種目を地域でできるようにするというだけであって、部活動ではないと思うので

す。委員長からもご発言があったように、僕の場合、中学校の先生を40年近くやっていますが、部活動は、3年生が1年生に教えるということが非常に大きなことで、普通は、その道に精通した実績のある大人とかプロなどが指導するのが、スペシャル感はあるのですけど、そのようなことではなくて、部活動は入部したときに憧れの3年生が1年生に教えてくれて、運動部だと2カ月とか3ヶ月ぐらいの付き合いで、3年生が引退していって、今度は自分が2年生になった時、あるいは3年生になった時に、指導を伝統化していくというのが最大の魅力だと思っています。私自身も中学校1年生から部活を始めて、指導者になっていったということを考えると、部活動というものが地域移行されるわけではなくて、全部リセットされてしまって、先ほどの案の中にもありましたけれど、別なものが生まれてくるというのも、この部分をなるべくこう穏やかに迎えるために、札幌市としてはまだニュートラルな状態ですよということを打ち出すのはすごくいいことだと思っています。立場上、僕も、あの関係者や札幌市以外の地域の方、あるいは全国的に札幌市の状況をいろいろ聞かれるのですけれども、札幌市としてはまだちゃんと決まってないのだということを全面に出して、半年おきぐらいに、どんどん状況は変わっていくと思いますので、それに合わせて対応していくのが大事なのではないかなと思っておりました。以上です。

【平本委員長】
　はい。ありがとうございます。学校活動は地域には本当の意味で移行できないのではないかというご趣旨であると思いました。上級生が下級生に教えるというのは、確かにおっしゃるとおりで、私も中学校の時の部活動を思い出すと、確かに先輩にいろんなこと教えてもらったということを、お話を伺いながら思い出していました。そういったことは地域のクラブでも起こっているのでしょうか。それとも、サッカーであれ、陸上であれ、地域のクラブになると、やはり競技経験のある指導者の方がいらっしゃって、上級生から下級生とか、先輩から後輩というような指導の体験はあんまりないものなのでしょうか。一般的にはどのような状況なのでしょうか。佐賀委員、サッカーではいかがですか？

【佐賀委員】
　私は小学校の少年団でしか指導したことがないのでクラブチームの状況を詳しく把握しているわけではありませんが、少年団であれば上級生が下級生のお世話をするということもあると思いますが、クラブではきちんとした資格を持った指導者がいるので、あまりそういうことはないのではないかと思います。クラブチームであっても、多少活動場所が遠くても親は付き添わずに地下鉄バスで自力で来させているというところもありますし、自立心を育てるということはクラブチームでもやっていると思います。
　話は変わってしまいますが、現在、例えば柔道の全国大会を廃止するなど、小学生段階でも大会をやめようという動きが出てきています。子どもたちがスポーツに純粋に楽しめるようにしようという動きが小学校段階でもありますし、ヨーロッパなどでは小学校レベルの全国大会はないという話もあります。大会に出るためにスポーツをしてきたという文化があるのかもしれませんが、その見直しを考えた時に、トップレベルの選手を目指すということであれば、民間のクラブを活用すると思いますし、費用面

にしても、自分が本当にやりたいなと思ったら高額の月謝を負担してでもクラブにいくと思います。これからのスポーツ環境は、より二極化していくのかなと思います。大会に出て自分のスキルを上げたいという子ども達と、人生を歩んでいく上での豊かなスポーツライフのために、毎日のスポーツを楽しみたいという二極の受け皿を作っていくということが我々の仕事でもあるのかなと思っています。体育の授業ですと、小学校から高校までを4年ごとの3つに区切っているのですが、小学校の高学年から中学校2年生までは、様々なスポーツを体験しながら、スポーツの多様性を味わいながら自分に向いているスポーツを見出していくことが、学習指導要領の中に盛り込まれています。そう考えると、中学生年代だと特定のスポーツで上を目指すという子どもばかりでなくても良いのではないかと考えますと、スポーツの在り方といいますか、札幌市として子ども達をどう育んでいくのかということを、これを機に根底からもう一度考え直すチャンスなのではないかと思います。部活を地域展開するということだけではなくて、札幌市で子ども達の将来まで見据えて、スポーツ環境を整えたらいったらよいかということも考えるといいかなと思いながら話を聞いていました。

【平本委員長】
　どうもありがとうございます。今のお話にはいろいろと今後のヒントになることが含まれていたと思います。例えば、仮に地域に移行を進めるにしても、大会出場などは目指さずにスポーツを楽しむ団体もあれば、中体連の全国優勝を目指す団体もあるというようなことが外から見た時に分かるようになっているといいと思います。場合によっては楽しく活動しているうちにだんだん競技に目覚めてくる生徒さんもいるでしょうから、その時にちゃんとステップアップできるようなルートを作っておけばいいと思うのです。学校部活動だと、例えば指導者の先生がものすごく熱心だと、初めから競技志向だったり、あるいは指導者の先生に競技経験ないとゆるく活動したりと、その中で、先輩から後輩への教育みたいなことが行われているのだと思います。学校によってずいぶん温度差がありそうです。私は決して全面移行するべきだという立場で話しているわけではないですけれども、団体ごとにカラーが明確になっていて、それに応じてかかる費用も変わってくるということがわかりやすくなっていれば、生徒さん達が選択しやすくなると思います。あるいは、本当はもっとゆるくやりたかったのに、いきなり競技志向のところに入ってしまって、こんなはずではなかったという悩み、楽しくプレーができればよかったのに二軍で球拾いばかりやらされるというような不幸から解放されるのではないかと思うわけです。

【尾崎委員】
　小中学校と高校の状況が若干違うのかなと感じております。先日、中学生向けの学校説明会を実施した際に、高校に入って一番楽しみにしていることを尋ねたところ、部活動という回答がやはり多かったです。私自身も部活動を長年指導してきて、これからの高校の部活動において何を目標にするかといったら、人間教育だと私は思います。勝利至上主義ではなく、人として成長する部分というのが、部活動にはあると自分自身で感じているところです。高校では探究活動が全国的なトレンドになっていますが、まさに部活動が探究の場で、先ほど上級生が下級生を教えるというお話がありましたけれども、今はユーチューブがどこも見られますので、ユーチューブを見れば、

どうやったらもっといいシュート打てるのかなとか、そういう動画を見てみんなで探究できるわけです。部活動はそのよう探究の場であってほしいという思いがあります。一方で、教員の立場から見ますと、私も管理職になるまでは土日もずっと部活動を指導してきましたが、今の時代環境において、一般の先生方にとっては過酷な環境です。また、先ほど宮地委員からもお話がありましたが、放課後に部活動をやっている中、他の業務で多忙な顧問教員が不在時に事故があった場合、すべて先生の責任、学校の責任となってしまうのは厳しいです。先生方は土日も家庭を犠牲にして活動していますので、先生方のワークライフバランス、ウェルビーイングを考えていくと、休日も平日も練習したいという生徒の一生懸命な思いがあるなかで、そこの部分にPTAの方や地域の方にうまく協力していただけるようなシステムを作っていただけたらと思っています。このたび、啓北商業高校と藻岩高校が再編して新設校になりますが、学校施設の担当の方に、新設校のグラウンドのサッカーコートが人工芝、照明が整備されて、そこに小学生も中学生も高校生も一緒になって、地域の方がその子ども達を指導している。そういう高校であってほしいという夢を語らせてもらいました。そのような地域が一体となって人間教育をしていくような場に部活動がなっていけばいいなと思います。先ほど大内委員がお話しされていたように、札幌市はそういうところをうまくやっていると評価されるような部活動の地域移行・地域連携を進めていっていただきたいと思います。

【平本委員長】
　ありがとうございます。地域移行というと学校から切り離されてしまうイメージもありますが、尾崎委員がおっしゃった地域連携というと最後まで学校が責任を持つようなイメージになりがちですが、そうではなくて、地域で部活動を支えるという理念が共有されれば、もう少し話が前に進んでいきやすいかもしれないと思います。どうもありがとうございました。他にはいかがでしょうか。

【和泉委員】
　大会を運営している中体連という立場で申しますと、やはり勝ちたい指導者、勝たせたい保護者はすごく多いと感じています。一方で、本来競技の専門家でもないし、やりたくないけどやらされている指導者も一定数います。それから、学校部活動においては勝利至上主義は良くないということで、ガイドラインで子ども達は守られていますが、本当に勝利至上主義のクラブチームは最初から中体連に出ようとは考えていませんし、そういう活動を求める子ども達がいてもいいと思います。そのうえで、スポーツを楽しむとか、音楽、美術などに親しむというのは、授業でいいのではないかということを最近すごく思っています。授業と競技性の高いクラブチームの間の活動をわざわざ作っていく必要があるのかと思うところがあります。子どものニーズと親のニーズも本当に様々であると思うのですが、どのニーズに合わせてデザインしていくかというところを、しっかり整理する必要があると思います。部活動の捉え方も全国的に様々なので、なかなか噛み合っていないところがあるように感じています。

【平本委員長】
　ありがとうございます。今のお話の最後の部分、部活動が、実は人によってだいぶ

イメージが違っていて議論が噛み合わないというご指摘はそのとおりです。この委員会は割と噛み合っている方だと思うのですが、おそらく部活動に対するイメージは様々です。先ほども少しお話ししましたが、教育委員会にとって、中学校の部活動とは何であるとお考えなのかということを共有する必要があると思います。現在のガイドラインで勝利至上主義が否定されているということを、私は初めて知りました。私も中学生のとき、45年前の話ではありますが、中学校の部活動は勝利至上主義以外の何物でもなく、朝練に遅れたら先輩に怒られ、休日の練習に何かの都合で行かなかったら月曜日に怒られというようなことが当たり前の時代であったことを懐かしく思い出しました。そもそもの部活動の定義について、教育委員会からご説明いただけますでしょうか。

【事務局：田中学びのプロジェクト担当課長】
　今のようなお話ですと、なかなか定義づけの範疇を超えるのではないかという気がしております。私も中学校長から話を聞く機会があったのですが、例えば、その学校では、一生懸命活動している部活動もあれば、美術部などは生徒の居場所的な感じが強いということでした。部活動というのは様々な多面性を有していると思います。先ほども話題になっていましたが、レベル感も1人1人違いますので、そのあたりをどうしていくかということも考えていく必要があると思います。そのような観点から、今年度スポーツ協会さんと一緒に多種目体験型のスポーツ教室を実証事業として実施してまいりました。この実証事業は居場所づくりになる可能性があるかもしれないですし、あるいはスポーツをやるきっかけになるような場になるかもしれません。

【平本委員長】
　ありがとうございます。そのほかにいかがでしょうか。

【清水委員】
　部活動から少し離れるかもしれませんが、私達は学校の授業の時間に演劇を使ったコミュニケーションワークショップというものをやらせていただいています。私達が用意したプログラムについて事前に学校側と打ち合わせするんですが、その打ち合わせで学校側と私達との思いがうまく一致しないと大体失敗してしまいます。せっかく一緒に子ども達のためにいいことやろうと思ってやっているのに、失敗の45分になってしまって、もったいないということがよくあります。校長先生と私達の事前打ち合わせがうまくいっても、当日の講師と担任の先生がうまく合わないということもあります。子ども達の前で実施する前にその点についてうまくケアできるようになると、もう少し見えてくるものがあるのではないかといつも思っていています。それにはおそらくきちんと言葉を交わす必要がある、私達がもっとコミュニケーションを取らなくてはいけない何かがあるんだろうなと思いますが、地域展開を進めていくうえで必要なことでもあるのかなと思いました。
　また、クラブチームではないですが、私もプロの俳優になりたい人たちのために講師をすることがありますが、そういった場合は月額1万円以上いただきますし、オーディションに送り出さなくてはいけないし、役を取らなくてはいけないので、厳しく指導することもあります。それと部活動はやはり違うんだろうなというふうに思いました。

【平本委員長】
　はい、ありがとうございます。地域とのコミュニケーションの問題は、地域移行した後でも当然重要なことになるので、そういうことがうまく行くような仕組みをビルトインしておかなくてはならないんだろうなと思いました。また、後半のお話で、部活動は厳しく指導するような場ではないのではないかというのは、やはり部活動を考えるときの1つの重要な視点です。勝利至上主義対人間教育という2項対立が適当かどうかはわからないですが、少なくとも、レベル感とか到達目標のようなものに応じて、活動の場を分けて、その場を選べるようにしておく方が、活動に参加する生徒さんたちにとっても幸せなのだろうなと、お話を伺いながら思った次第です。ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

【伊藤委員】
　皆さんのお話をお伺いしていて、やはりこの問題が出てきた背景には、人口減少が進んでいる今、この社会の中で枠組み、組織をいったん解体することが求められているのではないかということに立ち戻りまして、新たなものを作ろうとする委員会だと思うのですが、資料の中で750か所くらい新たな活動の場が必要ということですけれども、先ほど平本委員長もおっしゃったように、均一化された750か所ではなくて、個性のある作りにした方が良いのかなと思って聞いていました。人口減少が加速しているほかの地域に比べれば、まだ札幌市は活動の場を選べるような状況だと思いますので、レベルアップを目指すとか、演劇に特化しているとか、いろいろな色がある団体を民間で作って頂いて、それがどういうところなのか、あらかじめわかるように、子ども達が選べるような作りにしていただいて、初心者からレベルアップを目指した時に、こっちに移行したいとか、そういうこともスムーズに行われるような組織作りが大事なのかなと思いました。

【平本委員長】
　ありがとうございます。今のお話にありました生徒さんから見えやすいような仕組みというのは私も大賛成ですし、それがすぐにそうなるかどうかは別として、選べるようになるとすると、学校からある程度切り離されることによってそういうことが実現するということもあり得るかもしれません。その意味ではパターン4の全面移行とか、先ほどご説明にありました、新潟市の新しい部活動の形というのは面白いなと思いました。放課後も、教員の勤務時間内だけは、学校を居場所として使って、何か楽しいことやりましょうという発想なんですけども、そういうのもありなのかなと思いました。今日この場でどのパターンがいいかということを決める必要があるわけではないのですが、もし委員の皆様方で、どのパターンが長い目で見るといいよというようなご意見がありましたら、そういうことも含めて、残り時間でご発言いただければと思います。

【尾崎委員】
　先ほどの人間教育と勝利至上主義の観点なんですが、子ども達を相手にするからには指導者は絶対に教育者である必要があると思います。人間教育があって初めて勝利を目指す、感動を共有しようとなると思うんですよね。ですので、中学校の部活

動の代わりの活動となるためには、人間教育を理解したしっかりとした教育者が指導者になってほしいと強く思うところです。

【平本委員長】
　ありがとうございます。尾崎委員のおっしゃる通りでして、ドーピングでもなんでもして金メダルを取らせるというのはまったく人間教育ではないと思うんですよね。そういうことが部活動ではあってはならないということは本当にその通りだと私も思います。

【事務局：石郷岡学びのプロジェクト担当係長】
　先ほどから話題になっております部活動の定義ついて、本日の皆様のお話の根幹に関わる部分であると思いますので、少し補足させていただきます。手元にないので正確に引用することができませんが、部活動に関するガイドラインの中では、部活動は教育課程外の活動であるものの、学校教育の一環として、教育課程との関連を図るというような技術論的な定義がございますが、その他に、部活動の教育的意義として、体力や技術、技能の向上を図る目的のほかにも、先輩後輩との人間関係の中で、切磋琢磨したり、同じ目標に向かってみんなで一体となって取り組むことで得られる連帯感や達成感、責任感を育むといった意義や役割を有しているといわれています。そして、国の地域移行ガイドラインでは、こうした部活動の教育的意義や役割を、地域クラブ活動においても継承・発展させることが必要であるとされています。今日委員の皆様にお話いただいているのは、まさに札幌市として、何を大事にして、どう進めていくのだということを問われているのかなと感じたところでございます。

【事務局：田中学びのプロジェクト担当課長】
　ロードマップの中で、今後、競技団体等と調整を進めていくと書かせていただいておりまして、まさにどのようなことができるかということを丁寧に考えていきたいと思っております。今日ご出席いただいている皆様にも、既にご協力いただいていたり、これからご協力いただく場合もあるかもしれませんが、その内容を今後もこの委員会で皆様と情報共有していければと思っております。

【平本委員長】
　はい。ありがとうございます。それでは残り時間が5分程度ですが、最後にいかがでしょうか。

【佐賀委員】
　私が言いかけた話から話題が進んでしまいましたが、勝利至上主義がダメなわけではないのです。トップチームは勝利を目指してがんばっているわけなので、小学校とか中学校とかの年代でも、スポーツやったら、勝ちたいなと思うのは当然ですし、そういう勝ちたいという思いが大事なのですが、ただそこだけに特化して、先ほどお話がありましたように、人間を育てる、例えばここ最近そういうことがすごく言われていまして、例えば夏の甲子園で慶応高校が優勝した時にも、子ども達の自主性を大事にしているという話でした。また、不祥事があった大学のチームでも、チームを改革し

て行くことによって、子ども達が自分でいろいろ考えていく中で、結果としてやっぱり強くなっていくこともあるんです。だからやはり人間を育てていく中で、結果として勝利につながるという事例は多いです。それはあくまでも結果なのであって、もちろん勝利を目指してはいけないということではなくて、勝つために何でもするということが問題になっているんだと思いますし、子ども達に何が必要かということを踏まえながら部活動の在り方を考えた方がいいと思います。

【平本委員長】
　ありがとうございます。そのほかにご意見はいかがでしょうか。

【和泉委員】
　私自身、中学校長として、ちょうど今、次年度の校内人事をどうするか、喧々諤々議論しています。部活動の価値や目的は当然理解していますし、自分もお盆と正月しか休みがないようなことを経験してきました。でも現状は、やりたくない先生、やれない先生にお願いして、なんとか維持しているという事実がいつも見えなくなっているところだと思っています。部活動を維持するなら学校の先生の力だけではもう限界なので地域の力を借りなければならないということは、皆さんご理解いただいていることだと思っていますが、指導してくれる先生がいなければ、保護者に対して指導者がいないので次年度の部活動はやりませんと言えればいいのですが、校長としてなかなか言えないところがありまして、そうするとなぜ部活動をやってくれないんだといわれます。部活動は教員の本来業務ではないんだということを説明してもなかなか理解してもらえないのが現状です。

【平本委員長】
　ありがとうございます。本来、保護者の方々も地域に所属しているはずなので、先生ができないということであれば地域でできることを本当は考えなくてはならないのだと思いますが、これまでできたのになぜ来年からできないのかというのは、大学でもよく言われることですので、よくわかります。
　今回の議論で何か特段結論が出たわけではないと思うんですが、部活動の在り方ですとか、部活動の延長線上として地域に移行する際の課題のようなもの見えてきたと思います。それから、文化部、運動部問わず競技性や勝利を目指すような活動もあれば、楽しく集まって、人間関係を育んでいくような場というのもあるわけで、そういったそれぞれの活動の色が、地域移行した際に見えるようになっていて、生徒さんたちが自分の意思で選べるようになっているということが良いのではないかということ、そしてそれは拠点を作る場合にも、拠点ごとに色をつける、特徴をつけることに意義があるのではないかというご意見は、今後、制度設計をする上で大いに参考になるご意見なんだろうと思いました。
　それから、進め方のパターンについてどれがよいのだろうかということをずっと考えておりました。現場の声を聴くとパターン2とかパターン3の方がいいということもあるようではありますが、一方で経営学とか組織論の研究者の立場から私見を申しますと、パターン2とかパターン3はおそらく失敗すると思います。制度を変える際に、従

来の制度を引きずりながら新しい制度を並行して走らせてうまくいった試しというのはほぼありませんので、その限りにおいて、私はパターン4に思い切ってドラスティックにシフトするのもありなのではないかということを、組織論、戦略論の研究者としては考えているということを最後に申し上げたいと思います。

それでは、終了の時間となりましたが、委員の皆様方でこれだけはご発言をしておきたいというようなことがあれば最後にご発言いただきたいと思いますがいかがでしょうか。ございませんでしょうか。今日はいつもどおり活発なご意見をいただきまして、今後の方針を考えるうえで、事務局にとって非常に有意義だったのではないかと思います。それでは本日の議事はこれで終了致しまして、事務局に進行をお返しいたします。

【事務局：田中学びのプロジェクト担当課長】

長時間にわたりありがとうございました。事務局からの連絡ですが、次回の会議日程につきましては、改めて皆様のご予定をお伺いさせていただいたうえで、調整の上ご連絡させていただきます。

その際に、次回会議の議題・資料等についても併せてお知らせさせていただきます。皆さま、本日はどうもありがとうございました。

＜終了＞